

今年亡くなった
名演奏家を聴く **ハイティンク/グルベローヴァ/フレイレ**

プログラム

今年も残すところ1ヶ月を切りましたが、2021年を振り返りますと多くの名演奏家がこの世を去りました。今日は3人の名演奏家を偲びながら残されたライブ録音を聴いていただきたいと思います。

今年10月18日に74歳で亡くなった**エディタ・グルベローヴァ**は、世界最高のコロラトゥーラ・ソプラノとして活躍、日本でもファンの多い名ソプラノでした。3日後の21日には、30代の頃からの来日でおなじみだったオランダの名指揮者**ベルナルト・ハイティンク**が92歳で、さらに11月1日にはアルゲリッチとも親交の深かったブラジルの名ピアニスト**ネルソン・フレイレ**が77歳で亡くなりました。いずれもわが国ではおなじみの名演奏家たちでした。

今年のCDコンサートの開催は新型コロナの影響で3回中止を余儀なくされました。講演会の開催も実現出来ませんでした。来年の開催に向けて準備をしております。来年もよろしくお願い致します。(中川)

フランツ・シューベルト (1797~1828):

歌曲「糸を紡ぐクレートヒェン」D.118

エディタ・グルベローヴァ (ソプラノ)/エリック・ウエルバ (ピアノ)
(1979.3.4 ロンドン、クイーン・エリザベスホールでのLive)

レオ・ドリーフ (1836~1891):

歌劇「ラクメ」～第2幕 鐘の歌 “若いインドの娘はどこへ”

シャルル・クノー (1818~1893):

歌劇「ロメオとジュリエット」～第1幕 ジュリエットのワルツ “私は夢に生きたい”

シャルル・ルイ・トマ (1811~1896):

歌劇「ミニョン」～第2幕 ポロネーズ “私はティタニア”

エディタ・グルベローヴァ (ソプラノ)
フリードリッヒ・ハイダー指揮東京フィルハーモニー管弦楽団
(1990.12.12 サントリーホールでのLive)

エドゥアルド・グリーク (1856~1891):

ピアノ協奏曲イ短調Op.16

ネルソン・フレイレ(ピアノ)
ヤコフ・クライツベルク指揮ザールブリュッケン放送交響楽団
(1993.1.31 ザールブリュッケン、コンGRESハレ大ホールでのLive)

*** 休憩 ***

ヨハネス・ブラームス (1833~1897):

悲劇的序曲 Op.81

ベルナルト・ハイティンク指揮アムステルダム・コンサートヘボウ管弦楽団
(1974.5.8 東京文化会館大ホールでのLive)

カール・マリア・フォン・ウェーバー (1786~1826):

歌劇「魔弾の射手」序曲

ベルナルト・ハイティンク指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(2007.1.24 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

グスタフ・マーラー (1860~1911):

交響曲第3番ニ短調～第6楽章

ベルナルト・ハイティンク指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1990.12.15 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

2021年に亡くなった名演奏家

《エディタ・グルベローヴァ 1946.12.23～2021.10.18》

1947年、ドイツ系の父親とハンガリー系の母親のもと、スロヴァキアのブラチスラヴァに生まれました。ブラハ音楽院で学んだのち、ウィーンでルートヒルデ・ベツシュに師事。1968年22歳でブラチスラヴァの歌劇場にデビュー。1970年ウィーン国立歌劇場でモーツァルト「魔笛」の夜の女王を歌ってセンセーショナルな成功を収めました。この成功でウィーン国立歌劇場と契約し、1973年にはザルツブルク音楽祭に出演。さらにバーム指揮のR・シュトラウス「ナクソス島のアリアドネ」のツェルビネッタの大成功によりコロラトゥーラ・ソプラノの女王という名声を確立しました。ドイツ・オペラのほか、ロシアやドニゼッティといったイタリア・オペラ、グノー、トマなどのフランス・オペラでも絶大な評価を得ています。超絶的な技巧と圧倒的な表現力を兼ね備えた名ソプラノ。
コロラトゥーラ=速く、細かいパッセージの連続や、音をふるわせるなど技巧的で華やかな旋律のこと。

《ネルソン・フレイレ 1944.10.18～2021.11.1》

1944年ブラジルのイパネマ生まれの名ピアニスト。3歳でピアノを習いはじめ、12歳でリオ・デ・ジャネイロの国際ピアノ・コンクールで優勝。1957年ウィーンに留学し、名教師ブルーノ・サイドルホーフとステファン・アスケナーゼに師事。1959年から南米を中心に演奏活動を開始し、1964年リスボンのヴィアンナ・デ・モータ国際コンクールの優勝でヨーロッパ・デビューを果たし、1968年のロンドン・デビューが大成功した事により、国際的なキャリアを積み上げました。1969年にアメリカへデビュー。1971年に初来日して以来わが国にはたびたび訪れ、アルグリッチとのデュオ・コンサートも話題となりました。男性的な逞しい豪快なピアノと輝かしい音色を持ち合わせた名ピアニストでした。

《ベルナルト・ハイティンク 1929.3.4～2021.10.21》

1929年、オランダのアムステルダム生まれ。アムステルダム音楽院でヴァイオリンと作曲を専攻、フェリックス・フブカに指揮を学びました。卒業後オランダ放送フィルのヴァイオリン奏者を務めながら名指揮者フェルディナント・ライトナーに師事。1955年同オーケストラの第2指揮者となり、56年に指揮デビュー。この年に急病のジュリーニの代役としてコンサートヘボウ管弦楽団を指揮して成功を収め、翌57年に第1指揮者になると、61年にベイヌムの後を受け、若干31歳で同オーケストラの第4代常任指揮者に就任、1988年までその地位にありました。その間1967年～1979年ロンドン・フィルの首席指揮者兼芸術監督。1977年～1987年イギリスのグランドボーン・オペラの音楽監督、1987年～2002年ロイヤル・オペラ音楽監督、1995年からボストン交響楽団の首席客演指揮者、2006年～2009年シカゴ交響楽団首席指揮者を歴任。一方で、ベルリン・フィルには1971年、ウィーン・フィルには1973年に初登場、以来両オーケストラと密接な関係を築きました。日本には1962年コンサートヘボウ管弦楽団との初来日以来11回にわたってわが国を訪れています。2019年9月ウィーン・フィルとの共演（ブルックナー：交響曲第7番）を最後に引退しました。ハイティンクの常に安定した模範的な演奏スタイルは聴く者に中庸の安心感を与えますが、一方で物足りなさを感じる事もありました。しかし、80年代に入ると徐々に表現力が増し、音楽の深みを感じるようになりました。息の長い名指揮者でした。

曲目ミニ解説（一部のみ）

シューベルト：糸を紡ぐグレートヒェン

1814年18歳の時に書かれた歌曲で、ゲーテの「ファウスト」第1部からとられています。グレートヒェンが部屋で糸を紡ぎながらファウストを恋慕って歌う情景を巧みに表現しつつ、糸車の動きはピアノで表しています。この作品によって近代ドイツ・リートが誕生したとも言われる記念碑的傑作です。

ドリーブ：歌劇「ラクメ」第2幕「鐘の歌」「若いインドの娘はどこへ」

バレエ音楽「 Coppélia 」で知られるフランスの作曲家ドリーブの数あるオペラの中では、最も知られた作品。1883年に完成、その年の4月にパリのオペラ・コミック座で初演されました。19世紀イギリス統治下のインドを舞台に、駐在のイギリス士官と異教の娘ラクメとの悲恋物語で、鐘の歌は第2幕「インドの街の広場」で歌われるコロラトゥーラの名アリアです。

グノー：歌劇「ロメオとジュリエット」第1幕 ワルツ「私は夢に生きたい」

フランス近代音楽の先駆者のひとり、グノーのオペラの中では、「ファウスト」と並んでしばしば上演される名作で、有名なシェイクスピア原作の悲劇。1866年に完成、翌67年にパリのリリック座で初演されました。「私は夢に生きたい」は第1幕でジュリエットが歌う有名なワルツです。

トマ：歌劇「ミニヨン」第2幕 ポロネーズ「私はティタニア」

グノーと並んで19世紀フランス・オペラの重要な作曲家だったトマの代表作で、ゲーテの小説「ヴィルヘルム・マイステル」が基になっています。1866年11月にパリのオペラ・コミック座で初演。イタリア貴族に生まれながらジブシー女となって諸国を流浪するミニヨンと女優フィリーナの、学生ヴィルヘルムをめぐる恋物語。第2幕で歌われる「私はティタニア」は有名な序曲でも使われている名旋律です。